

大学キャンパスの場所アイデンティティに関する研究 -コロナ禍におけるキャンパスの大切な場所に関する調査より-

5220D017-1 呉佳珊*

本研究は、自粛期間で行ったオンライン授業という大学キャンパスから離れる体験に注目し、大学キャンパスという物理的な場所と触り合わないことはどのように大学生のアイデンティティに影響を与えるかを明らかにすることを目的とする。まず、キャンパスでの大切な場所とその理由を自己形成の過程の観点から分析することによって、キャンパスの価値を四つに整理した。そして、コロナ禍によってオンライン授業期間中によく思い出したキャンパスでの場面の調査から、空間に対して自分の経験を写像するプロセスに着目し、自己感覚の形成について考察した。その結果、空間、他者と自分の関係を着目し、四つのモデルを得られた。以上の考察を踏まえて、最後に個人属性と関連付けた分析をすることにより、実際に通学して大学生活を経験することによって、自分自身の捉え方が変化し、より自分のアイデンティティを確認できることが明らかとなった。

Key Words : 場所アイデンティティ, 大学生, キャンパス, 場所

1. 序論

(1) 研究の背景と目的

人は物理的空間との関係を構築し、意味を与えることによって自分の場所が生まれる。ある空間で経験をしたりすると、自分なりの文脈が形成され、場所が意味を持つようになる。場所が個人の自己を定義し、自己概念を維持する力を持つ時、その絆は場所アイデンティティと呼ばれる¹⁾。場所アイデンティティの生成契機の一つである日常のルーチンから一時的に離れる体験によって、場所を捉えなおすことがあると考えられる²⁾。また、自己形成期の体験の中で、何らかの感情を伴って、度々思い起こされることによって、心の中での風景として定着する。

また、発達の危機や移行期と呼ばれる大学時代で経験したことは個人の自尊心を支え、継続的なアイデンティティの基盤となる³⁾。大学生は大学キャンパスという物理的な空間で勉強、交流することにより、社会化を過程し、アイデンティティを形成する。しかし、新型コロナウイルスの影響で、2020年4月に緊急事態宣言が発令され、多くの大学は授業のオンライン化が推奨された。これは感染リスクを軽減する一方、キャンパスで大学生活を送る体験が失われてしまう。具体的には所属大学の環境に触れる体験、または友人と一緒に勉強や交流することなどができなくなることにより、自分の大学生としてのアイデンティティの形成にも影響があると考えられる。

以上に示した問題意識より、オンライン授業により通学できないという体験は、通学が当たり前であった学生にとって、大学キャンパスという場所を捉えなおす契機となると考えられる。

本研究では、自粛期間で行ったオンライン授業という大学キャンパスから離れる体験に注目し、早稲田大学の大学生にとってキャンパスでの大切な場所とキャンパスに関して記憶に残っている風景の内容分析や個人属性との関係性を把握することで、通学することはどのように大学生のアイデンティティを支えるかを明らかにすることを目的とする。

(2) 研究の流れ

はじめに1章では、「場所アイデンティティ」に関連する既往の議論を整理した上で、本研究での「場所アイデンティティ」の定義を行う。さらに、本研究で分析対象とする「キャンパスでの大切な風景」、「記憶に定着したキャンパスに関する心の中の風景」と「アイデンティティ」との関係性を整理し、分析の方法を示す。次に2章では、大学キャンパス内の大切な場所の調査によって、空間利用の実態を明らかにし、個人にとって重要である体験と心情などの特徴を把握し、主体属性との比較を行う。3章では、2020年春学期のオンライン授業期間によく思

*早稲田大学大学院創造理工学研究科建設工学専攻 景観・デザイン 佐々木葉研究室 修士2年

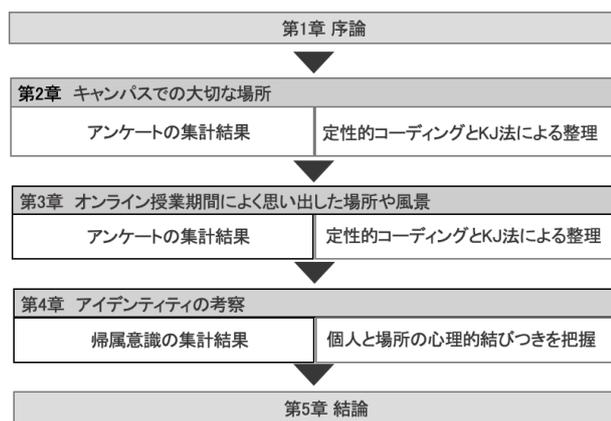


図 1.本研究の流れ

思い出した場面の調査によって、キャンパスと一時的に離れている間にもよく思い出された風景を明らかにする。4章では、帰属意識の分析によりアイデンティティの考察を行うため、大切な場所やよく思い出した場面と個人属性を関連付けた分析を進める。そして、個人の体験によって集団で共有された共通性と類似性を比較する。5章では、それらの結果を踏まえて、キャンパスの場所アイデンティティを明らかにする。

(3) 用語の定義

a) 大切な場所

人文地理学では、透明で均質的な「空間」に対し、人々の主観的な意味が付与されたものを「場所」としている⁴⁾。大切な場所は心の拠り所を意味し、これまで経験してきたことの記憶、重要な他者との思い出、社会的な関係といった個人的な意味を結びつける。故に、大切だと思う場所により、その人が大事にしている感情や自我同一性の考察ができる。そして、一人一人の場所との関係から地域と集団の全体の構造を見ていくことができる。

b) 場所アイデンティティ

通常、場所アイデンティティは二つの意味を持つ。一つ目は地域らしさを指し、場所が持つ特徴を意味する場所のアイデンティティである。二つ目は、自己という存在への場所の投影としての意味が強調された自己の場所への帰属感である⁵⁾。エリクソンは、ある居場所、適所を得ることで、自分のアイデンティティをつかむ。居場所、または大切な場所とその時の心情を入り口として、アイデンティティと迫っていく⁶⁾。

本研究は後者の定義を取り上げて、キャンパスという空間を共有した集団に当時の生活行動を想起させ、個人の体験の語りの中から共有された心の中の風景を抽出することで、自分の経験を写像するプロ

セスから、その空間に対する感情まで考察する。

(4) 研究の位置付け

地域イメージや場所愛着といった場所と個人の情動的なつながりに関する研究が多く存在するが、大学キャンパスを対象とした研究は少ない。大学キャンパスの空間構造に関する研究は多くあるが、大学生のキャンパスに対する認識、またはキャンパスとの関係を分析することでアイデンティティを明らかにする研究はない。そして、新型コロナウイルスの感染が拡大後、キャンパス利用の変化により大学生のアイデンティティの変化に関する研究はない。

本研究は、大学生を対象とし、キャンパスという空間を共有した集団に当時の生活行動を想起させ、個人の体験の語りの中から共有された心の中の風景を抽出することで、キャンパスの空間構造を基に空間認識と自分の経験を写像するプロセスから、その空間に対する感情まで考察する点が特徴である。

2. キャンパスでの大切な場所に関する調査と分析

(1) 調査概要

本研究では早稲田大学の新宿区の三つのキャンパスの学生を対象とする。回収率を高めるため同じ内容の紙アンケートとウェブアンケートを作成する。調査方法に関しては、各キャンパスの学生ラウンジ、図書室にてアンケートを回答してもらうという方法をとる。アンケートでは回答者の基本情報、キャンパスでの大切な場所とその理由、場所に対する感情、オンライン授業期間よく思い出したキャンパスでの場面、所属する団体に対する意識を回答してもらう。

調査の概要を表1に示し、調査協力を得られた学生の人数は合計221人となった。調査対象者の基本属性は表2に示す。調査対象が学部1年生から博士3年まで分布しており、所属する学部、研究科と通学キャンパスには極端な偏りは見られなかった。

(2) 大切な場所の集計

アンケート調査では、大切な場所において240件の回答が得られた。大切な場所の分類とその理由の例を表3に示す。オンライン授業になる前(2020年春学期)にすでにキャンパスに通った経験がある学部3年以上の学生とオンライン授業が始まる時期以後(2020年春学期)に入学した、現在の学部1年、2年生の間には、場所の利用とそれに対する気持ちに差がある。具体的には、学部3、4年生は過去にキャンパスで経験した自分自身のエピソードを語るこ

とができる。これはキャンパスの利用経験により、場所アイデンティティを形成しているためと考えられる。そのため学部1,2年生と学部3年生以上と分けて、三つのキャンパスでの大切な場所とオンライン授業期間(2020年春学期)によく思い出したキャンパスの場所をプロットする。この分布の様子をそれぞれ、図3、図4、図5に示す。

表1 調査概要

調査対象	早稲田キャンパス、戸山キャンパス、西早稲田キャンパスに日頃通学する大学生221人
調査期間	2021年10月25日~11月11日
調査方法	各キャンパスのラウンジでのアンケート調査、ウェブアンケート調査
調査項目	設問1 回答者の属性(性別、学年、学科など)
	設問2 キャンパスでの大切な場所とその理由、その時の気持ち
	設問3 オンライン授業期間(2020年春学期)によく思い出したキャンパスの場所と風景
	設問4 所属団体に対する認識と自己評価

表2 回答者属性

性別		留學生				学年	
男性	女性	答えない	はい	いいえ	答えない	B1	B2
110	106	2	208	10	0	37	59
所属							
早稲田キャンパス(134)							
政経	法	社会学	商	教育	国教	M1	M2
32	21	8	18	29	26	8	8
戸山キャンパス(36)				西早稲田キャンパス(44)			
文	文	基幹	創造	その他(4)	D1	その他	
16	20	7	20	27	1	4	

表3 大切な場所の分類とその理由の例

場所の分類	場所の例	理由の例	その時の気持ちの例
大学のコミュニティスペース(85)	教室、3号館ラウンジ、7号館のW-space、63号館カフェテリア、スタバ	学部1,2年生 飲食、会話もできるので、オンライン授業を受講しながらの食事や発言をしなければならない授業の受講も可能であり、利用しやすいため	便利、落ち着く
		学部3年生以上 みんなで集まれて、交流できる場所だから大切だ	楽しい、安定感
学生団体が活動する場所(44)	学生会館、ICC、部室	学部1,2年生 サークルでよく使っているから。学館にいたら知り合いがいる。	安心感、ありがたい
		学部3年生以上 サークル活動場所として使用していた。他のサークルとの交流もあり、自身の大学生活における人脈形成の場となった	楽しい、ワクワク
自己研鑽の場所(52)	中央図書館、研究室、学生図書室	学部1,2年生 勉強や研究に必要なさまざまな資料を見ることができ、静かな環境で自学に取り組み	快適、集中できる
		学部3年生以上 資格勉強、法科大学院受験勉強に適した場所である	感謝、落ち着く、集中できる、居心地良い
環境が良い場所(15)	中庭、戸山の丘、大隈庭園	学部1,2年生 芝生で寝るのが気持ちいい	幸せ、心地よい
		学部3年生以上 学部2年の頃、友達と授業をさぼって、たくさん落ち葉でキャラクターの顔をつくってあそんだ。子供っぽい遊びだけど一緒に楽しんでくれる友達がいる、作業中のおしゃべりでさらに仲良くなった気がして、嬉しかった。	心地よい、落ち着く
シンボリックな建物(6)	大隈講堂、大隈銅像	学部1,2年生 友人と集合する際に便利	便利
利便性が高い場所(10)	生協、本屋、手洗い、喫煙所	学部3年生以上 春には様々なサークルが新歓活動を行い、秋には木々が見事な紅葉を見せ、季節ごとに風情がある。また、早稲田キャンパス内で最も多様な学生が通る場所であり、早稲田大学らしさあふれる場所である。	感動、便利、誇らしい
		学年により差がない 毎日使うところだから。	便利、綺麗
その他(7)	演劇博物館、正門	学年により差がない 建物の美をそのまま感じることができる。展示品も興味を惹かれるものが多い。	安心感、知的好奇心

また、学年別に大切な場所の特徴を探るため、最頻出する7つの場所と12つの言葉を自由記述データの形態素解析により求めた。そして、最頻出語を列とし、学年を行とするクロス集計表を使って、コレスポネンス分析を行った。分析結果の特性図を図6に示す。

第一軸は「行う活動の性質(勉強中心—社交中心)」、第二軸は「場所の類別(特定の場所—多目的、不特定の場所)」が表現されていると解釈できる。また、図6中の枠はコレスポネンス分析で得られたサンプルスコアを用いてクラスター分析を行った結果を囲っている。

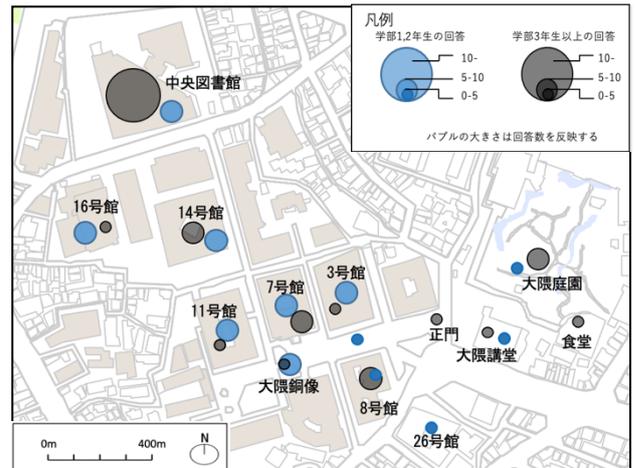


図3 早稲田キャンパスでの大切な場所の分布

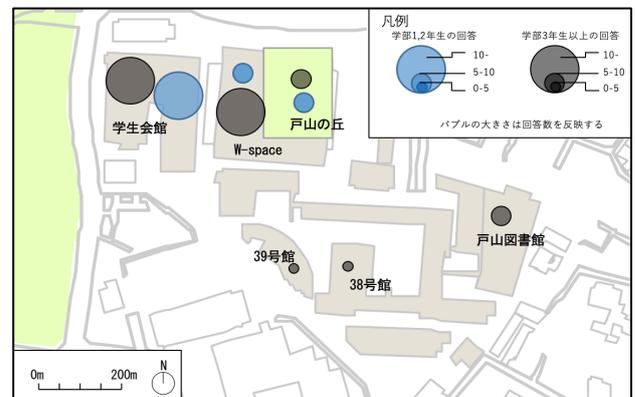


図4 戸山キャンパスでの大切な場所の分布

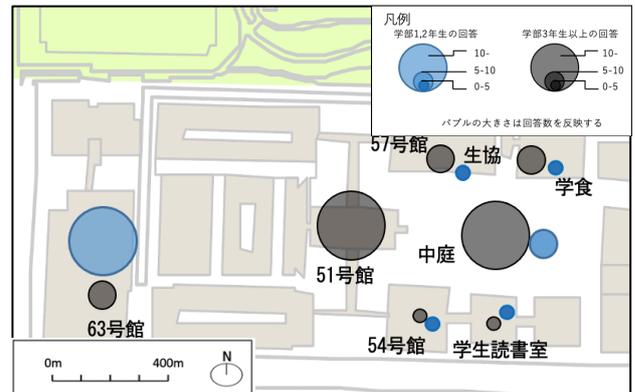


図5 西早稲田キャンパスでの大切な場所の分布

図6から、学部4年生では学年が低い頃は不特定の場所で勉強活動を多く行い、学年が上がって大学生活が落ち着くことにつれて、特定の場所で社交的な活動といったより多様な活動を行う傾向があると考えられる。そして、卒業に近い学部4年生は進路を考えたり卒業の準備をしたりすることによって、固定の場所で資格勉強や就職に向けて自己成長的の活動に回帰する傾向があるとわかる。その過程に伴いアイデンティティを形成していくと考えられる。

(3) 大切な場所の分類

同じ場所であっても、その場所が持つ性質や場所との関係によって、大切に思う理由が異なっている。本節では、個人にとってその場所が大切である理由に注目し、具体的な個々の場所が人々とのどのような関係を持つかを分析し、場所の良さ、価値を考察する。具体的には、キャンパスでの大切だと思う場所に関するエピソードとその時の気持ちのテキストデータから定性的コーディングを行い、ラベル付けをする。

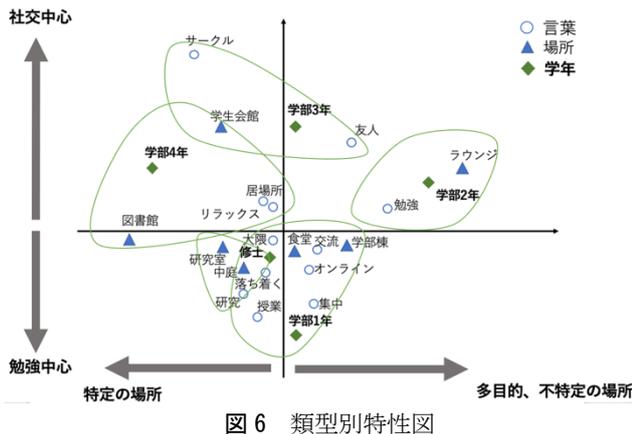


図6 類型別特性図

その作業により、場所の機能と環境に対する直接的な評価、場所を使って活動するための間接的な評価、場所で身分を確認できるという所属感、と三つの観点を分類した。さらに、場所の機能の評価を「勉強に適合している」と「環境が良い」と分類し、行う活動を「自己成長活動」と「充実を感じる活動」と分類した。ここで、勉強に適合している環境であることと自己成長活動を行うことの目的が一緒のため、一つの価値に合併できると考え、その結果、四つの価値を得た。大切な場所のカテゴリーと記述例を表4に示す。

3. コロナ禍によく思い出した場面の分析

(1) よく思い出す場面の集計

現在の学部1年、2年生は2020年春学期に通学経験がなかったため、オンライン授業期間(2020年春学期)によく思い出したキャンパスの場所という質問の回答は不要とし、学部3年以上の学生から93件の回答が得られた。結果を表5に示す。

表5 よく思い出したキャンパスの場面とその理由の例

場所	数	場面の例	分布
教室	22	大人数の授業は大体そこで行われていたため、コロナで失われた大人数で同じ空間にいる場面としてAV教室をよく思い出していた。	早稲田キャンパス：8号館 戸山キャンパス：AV教室 西早稲田キャンパス：52,53,54号館
図書館	14	資料にアクセスしやすい、リラックスできる環境である、研究書庫で資料を読んでいる姿を思い浮かべる	早稲田キャンパス：中央図書館 戸山キャンパス：戸山図書館
学生会館	14	しょもない思い出でも、必死で練習した思い出も全部詰まった場所だから。早稲田祭の後、おもちゃの刀出ちゃんバラしたり、マリオカートで遊ぶために溜まってたりした思い出も、夜22時の閉館まで、コンサートのために1人でこもって練習したことも、全部キラキラ出して、あの頃に返らせてくれ、という感情でいっぱいでした。	戸山キャンパス
ラウンジ	16	友人と一緒に昼食を買ったり食べたりしていた場面を思い出した。それが楽しかったため思い出した。	早稲田キャンパス：7号館のW-space 戸山キャンパス：W-space 西早稲田キャンパス：63号館カフェテリア
環境の良い場所	12	風が気持ち良い、日光が暖かい	早稲田キャンパス：大隈庭園、演劇博物館 戸山キャンパス：戸山の丘、坂 西早稲田キャンパス：中庭
シンボリックな建物	8	授業を受けに行く時に必ず通るから、象徴のように感じる	早稲田キャンパス：大隈講堂、大隈銅像
その他	7	可愛い司書さんがいて、その人がいる時に本を借	食堂など

表4 大切な場所のカテゴリー

大分類	理由		場所	記述例
	小分類			
空間自体の良さ (直接的な評価)		多目的で使える	大隈庭園	芝生で寝るのが気持ちいい
		景色が良い	大隈庭園	緑があると心を落ち着かせることができ、ストレスを緩和できる
		雰囲気が良い	中庭	息苦しいキャンパスの中で、空気を抜いてくれる大切な場所になっていると思う
		施設が充実	学生ラウンジ	ほぼ全席充電可能なPC作業メインなので嬉しい
		空間の仕切りが良い	学生ラウンジ	オンライン授業がまだ多いので、個室が沢山ある所が今の時期は大切だ
		モチベーション上げる	学生ラウンジ	ラウンジに行けば同じような勉強をしている人たちがいて刺激をうけるから
行った活動 (間接的な評価)	習慣的に行う活動	授業や勉強に関すること	教室	好きな授業(宗教関係)がそこでやっていたから
		読書に関すること	図書館	蔵書数が充実していて、読みたい本が読める/思わぬ本との出会いがあり、良い場所だと思った
		仕事、職業に関すること	学生ラウンジ	就活中にESの制作をしたから
		クラブ、サークルに関すること	学生会館	サークルの活動場所、練習も主にここでするので、この場所がないとすぐ困る
		対人関係に関すること	学生会館	サークル員と交流の場になっており、空きコマに集まって雑談をすることで仲を深めた
	大切な思い出	その他の活動	スターバックス	時間満しと言ったらここをずっと使う
所属感	自己受容	大隈銅像	受験生の時から憧れの風景だったし、憧れの舞台にいる人だって実感できる	
	身分確認	ラウンジ	大学生になったと感じ嬉しい	

凡例	
価値	自分の目標や理想の実現
	充実感がある
	感情の安らぎ
	帰属間

(2) よく思い出す場面の類型化

オンライン授業期間によく思い出した場面の本質を分析するため、自由記述回答を整理する。場面の中の自分と他者の状態に注目し、6つのタイプを得た。その結果は表6に示す。

タイプAでは特定の他者と交流する場面であり、「サークルの始まる前、終わった後に友達とだらだら談笑できる場面」というような、既に親しい人との会話、交流が思い出される。教室、学生ラウンジ、学生会館といった複数の場所に分布している。また、不特定の他者と交流する場面もある。タイプBは他者と交流しない場面である。直接会話をするわけではないが、場所と時間を共有し、お互いに人がいることを認識しあっている状態となっている。その状態によってモチベーションを感じたり、ある団体に帰属する実感を感じたりすることができる。タイプCは場面の中に人がいないが、キャンパスの景色と機能的な施設を評価する。タイプDは場面を描いていないが、習慣的に使っているため、よく思い出す。

また、回答者の学年ごとの回答数を集計した。その結果を図7に示す。

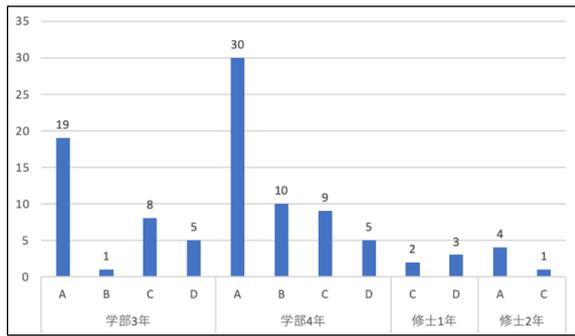


図7 学年別のよく思い出した場面

学部3年生、学部4年生、修士2年生に、タイプAが多く見られた。キャンパスで友人または実際に知り合った人と直接に触れることが大事だとわかる。学年間の差異の原因として、一つは、現在の学部4年生の通学経験がより豊富であることで、記憶に残る場面もより豊富となること。もう一つは、現在の学部3年生にとって、一年間のキャンパスライフを過ごして、突然通学ができなくなることに對し、既存の友人関係をより大事に感じているのに対し、二年間の通学経験を有し、キャンパスライフに慣れた現在の4年生は、不特定の他者との関わり、つまり場所によって生まれる日常を楽しむことができるためと考えられる。

4. アイデンティティの考察

(1) 帰属意識の相関関係

全での回答者にそれぞれ自分の大学、サークル・部活、学部・学科およびゼミ・研究室という4つの項目への帰属意識を5段階評価で回答してもらった。学年別の結果を表7に示す。

表7 学年別回答者の帰属意識

	早大生としての所属認識					サークルの所属認識				
	強く持っている	やや持っている	どちらでもない	あまり持っていない	全く持っていない	強く持っている	やや持っている	どちらでもない	あまり持っていない	全く持っていない
学部一年	20%	63%	9%	9%	0%	37%	37%	6%	6%	14%
学部二年	27%	45%	12%	14%	2%	33%	27%	10%	12%	18%
学部三年	40%	40%	9%	9%	2%	38%	18%	13%	9%	22%
学部四年	37%	42%	9%	9%	4%	33%	30%	12%	14%	11%
修士以上	38%	38%	4%	21%	0%	13%	29%	21%	8%	29%
	学部・学科の所属認識					ゼミ・研究室の所属認識				
学部一年	20%	51%	11%	11%	6%	0%	11%	26%	0%	63%
学部二年	22%	57%	8%	10%	2%	6%	16%	20%	10%	49%
学部三年	38%	42%	7%	11%	2%	13%	36%	33%	9%	9%
学部四年	33%	39%	16%	11%	2%	26%	51%	7%	12%	4%
修士以上	29%	29%	13%	25%	4%	25%	42%	4%	21%	8%

表6 よく思い出す場面の分類とモデル

大分類	小分類	タイプ	場所の例	理由/場面の例	モデル	
自分がある	他者がいる	特定の他者	ラウンジ	みんなでテスト勉強した、他愛もない話で盛り上がる	○ → ●	
			学生会館	サークルの始まる前、終わった後に友達とだらだら談笑できる場面		
			教室	人がみっちりとして廊下に詰まっていると誰かがうさく、友達と次の授業の話をしている場面。		
	他者がいる	不特定の他者	戸山キャンパスの坂	戸山キャンパスの坂を歩いていると誰かしらに会う、その場面をよく思い浮かべる	○ → ●	
			ラウンジ	早大生として同じ空間で頑張られると感じる		
			学生会館	楽器の練習をしている、サークルのみんなが練習をしている、音や熱意が伝わってきて自分も頑張ろうと思った		
自分がない	景色	C	教室	天井が高く、席も多い上しっかりとした教壇があり、入学前から抱いていた大学の教室のイメージをものであるから、また、天窓空自然光が差し込むと室内の雰囲気が好き。	○ → ●	
			中庭	桜が満開になったり、葉が青々と生い茂ったり、紅葉したり、落葉したりして、季節を感じられる		
			図書館	図書館は資料も手に届くところにあり、自習も集中してしやすい場所だからです。勉強のやる気が出ないときや、捗らない時に思い出しました。		
	場面を描いていない	D	機能	図書館	よく利用したため	○ → ●

凡例

- 自己
- 特定の他者
- 不特定の他者

視対象場

- ラウンジ
- 学生会館
- 図書館
- 教室

場所

- 象徴する場所
- 環境が良い場所

表 7 により、学年が上がるにつれて帰属意識が高くなる傾向があるが、学部 2 年生だけは大学、サークル・部活の帰属意識の中に「強く持っている」と「ややもっている」の比率が学部 1 年生より低いことがわかる。

また、2020 年春学期以後の、大学の諸施設それぞれの利用制限と授業の形態の変化の概要を図 8 に示した。図 8 により、2020 年の春学期ではすべての授業がオンラインで行い、2020 年の 6 月までキャンパスは入構禁止となり、開放しても諸施設の制限があることがわかる。それに対して、2021 年 1 月から対面授業 7 割実施となり、キャンパス施設利用制限も緩和している。つまり授業のオンライン化は継続していても、現在の学部 1 年生は大学に入ってから普通のキャンパスライフを体験することができ、最もコロナ禍により通学できないことに影響されたのは現在の学部 2 年生である。

また、四つの項目で、お互いの相関関係を考察した上で、重回帰分析を行った。結果は表 8 に示す。早大生としての認識度合いを従属変数とし、学部・学科とサークル・部活に所属する認識度合いを独立変数とした場合は、有意な正の係数が確認された。以上により、オンラインで専門の授業を受けることができたことにより「学部・学科」「ゼミ・研究室」の帰属意識に影響しなかった一方で、リアルにサークル活動したり、キャンパスと触り合ったりすることができなくなることによって、帰属意識が低くなると考える。

表 8 帰属認識度合いを独立変数とした重回帰分析

サークル・部活の所属意識 (n=206)		学部・学科の所属意識 (n=206)	
係数	t	係数	t
0.158	4.042	0.504	9.299

(2) アイデンティティの自己評価による考察

アンケートでは、「あなたは、自分がどんな大学生であると認識していますか」という自由記述の設問を設け、合計 213 件の回答を得られた。自由記述の中に、「普通の大学生」「理系大学生」のような客観的な記述を 3 点に、ポジティブとネガティブな記述をそれぞれ程度により、5 点から 1 点に点数をつけた、記述と点数の例を表 9 に示す。

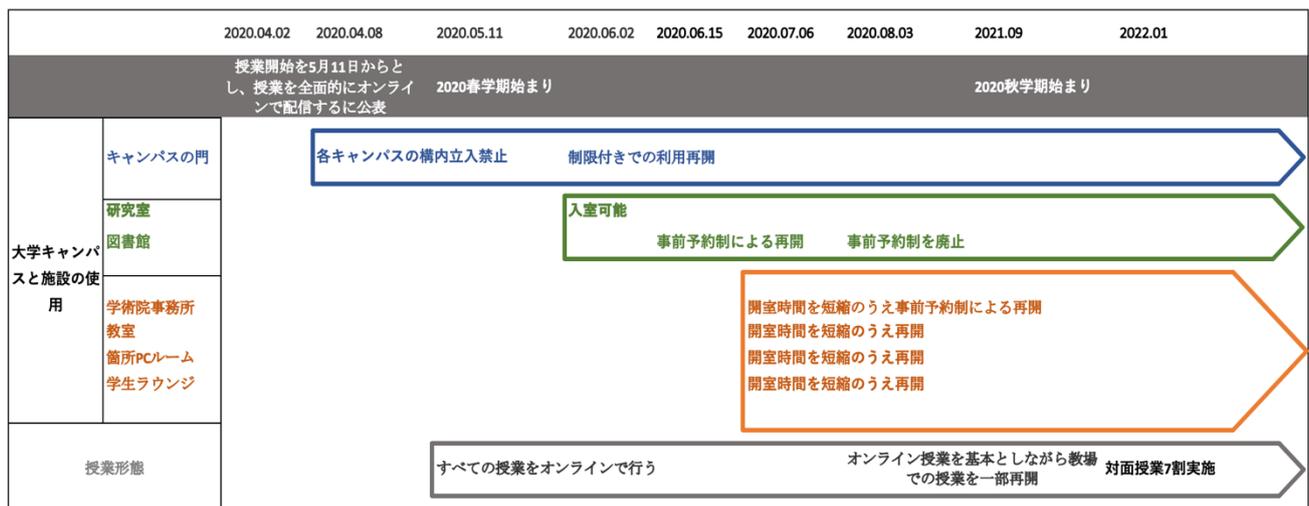
回答者の学年と自己評価の点数を集計した結果を図 9 に示す。図 9 により、学年が上がるにつれて自己評価が高くなる傾向があるが、学部 2 年生だけ 3 点以下のネガティブな記述の比率が高いことがわかる。また、学年別で記述の内容を考察した結果を表 10 に示す。

表 10 から、学部 1 年生は自己評価が高い時に「真面目」という言葉が多く、自己評価が低い時に「あまり勤勉ではない」という勉強面からの評価が多く出る傾向がある。その一方で、学部 3, 4 年生の中には「自由」「充実」といった多次元から自己評価をする傾向がある。それは実際に大学生活を体験することによって、より自分自身の行為を認めるようになって自我同一性のアイデンティティを形成しているためと考える。また、ネガティブな記述が

表 9 自己評価の点数と記述の例

点数	記述例
5	真面目な学生、やることはほとんどやる学生、友達と楽しく過ごす学生 サークルとゼミで忙しいけど、充実した大学生活を送る大学生 自由闊達
4	多くのコミュニティに入って、人脈を広げようとしている人だ 大学は社会勉強の場所、授業よりサークル活動を優先することもある やりたいことをやる学生
3	かもなく不可もない一般人、コロナがなかったらもっと違った人生だったのにと後悔が残っている 理系の大学生
2	ただ授業を受けているだけで夢も目標もないつまらない大学生。 大学生らしくない、苦しみ
1	だらくしたゴミ大学生

図 8 大学の諸施設の利用制限と授業の形態の変化



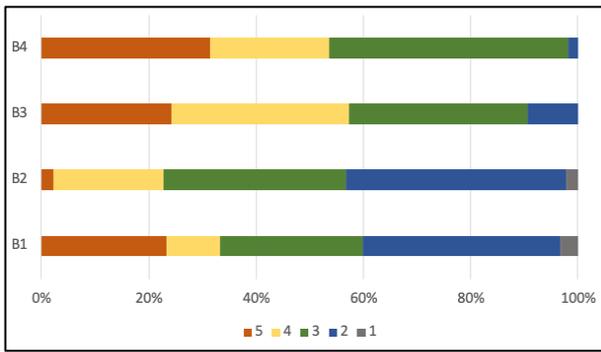


図9 学年別自己評価の割合

表10 自己評価の分類と学年別の結果

		学部1年	学部2年	学部3年	学部4年
ポジティブな記述 (5点と4点)	真面目	6	4	4	3
	充実	2	3	10	17
	自由	0	0	6	9
どちらでもない (3点)	普通	7	10	6	9
	勉強に力を	0	0	5	15
ネガティブな記述 (2点と1点)	怠惰	9	4	2	0
	彷徨	3	14	0	0

多い学部2年生の中に、「将来何をしたいのが明確な目的意識が持てず、時間を無駄に消費している悪い大学生の見本ようになってしまっている」といった彷徨を表す記述が多い。それは1年生から通学できない、最もコロナ禍の影響を受けた学年のため、キャンパスライフを実際に体験できないことと関係があると考えられる。

5. 結論

(1) 本研究のまとめ

本研究では、キャンパスの大切な場所の分析により、得られたキャンパスの四つの価値が得られ、その中でも特に、個人目標の実現、充実性を感じる、所属意識を強めるといった三つの価値が自己形成と関わることがわかり、その三つの面から大学生の自己形成過程に大きな影響を与え、自分自身を肯定的に見ることによってアイデンティティを支えていることが明らかとなった。

また、よく思い出す場面の分析により、通学できない時期で、大学で友人と会うことは最も多く思い出されることがわかる。一方、キャンパスで人と交流することができなくなるだけではなく、その場所で知らない他者と共にいる感覚にも大学生に影響を与えていることが明らかとなった。

最後に、所属意識と個人評価を考察した上、通学して大学生活を経験することによって、自分自身の捉え方が変わり、より自分のアイデンティティを確

認できることが明らかとなった。また、2020年春学期以来、大学の諸施設それぞれの利用制限と合わせて考察することによって、最もコロナ禍により通学できないことに影響された学部2年生は、目標性がないと感じられやすいなど、個人の大学生としての自己評価に影響していると考えられる。

(2) 今後の展望

本研究では、アンケート調査により、コロナ禍により通学できないことが大学生のキャンパス空間の利用とそれに対する思いについて、学年ごとの特徴をまとめた。コロナ禍により新たな生活仕様の中で、物理的な環境との触れ合う状況の変化は人々の内面の感情にもかなり大きな影響を与えたと考える。一時的な変化もあるが、個人のある段階で起きた変化は将来の様々な面に作用することもあると考えられる。キャンパスのような基本的には使用価値のために設けられた施設にも単に「使う」こと以外に、人々に提供、新たに生まれた価値は考えられる。また、テレワークといった様々なオンライン化により得られるものと失われるものがあり、失われたものをサイバー空間を構築する時に補填する可能性については考えられる。

<参考文献>

- 1) 大谷華：場所と個人の情動的なつながり、環境心理学研究, 2013年1巻1号 p. 58-66
- 2) 所谷茜, 大野隆造: 異日常的体験を契機とした場所アイデンティティの生成, 2015年18巻1号 p. 5-
- 3) 山本多喜司, S・ワップナー, 人生移行の発達心理学, 北大路書房, 1991
- 4) Relph, Edward『場所の現象学—没場所性を越えて』(高野岳彦・阿部隆・石山美也子訳) 筑摩書房, 1976
- 5) 呉宣児: 語りから見る原風景: 心理学からのアプローチ, 萌文社, 2001
- 6) 所谷茜, 大野隆造: 場所アイデンティティ生成に関わる居城地域の対象化, 日本環境心理学会第8回大会, 2015年第3巻第1号
- 7) 茂原朋子・渡辺貴介・十代田朗: 青年の“原風景”の特性と構造に関する研究, 第26回日本都市計画学会学術研究論文集, 457-462, 1991
- 8) 木場佳音, 杉田早苗, 土肥真人: 個人の大切な場所が織りなすまちの構造の研究, 日本都市計画学会, 都市計画論文集, Vol. 56 No. 3, 2021
- 9) Tuan, Yi-Fu (1974) *TOPOPHILIA: A Study of Environmental Perception, Attitudes and Values*, Englewood Cliffs: イーファー・トゥアン『トポフィリ

ア——人間と関係』小野有五, 阿部一訳) せりか書房, 1992

- 10) 古川雅文, 浅川潔司, Hicks, J. E, 南博文: 大学新入生の新環境認知と適用過程に関する研究—多変量解析による分析 富山大学教育学部紀要, 31, 121-128
- 11) 徐きょう, 土肥博至: 都市と大学キャンパスの関係性に関する考察 : 日韓両国の事例研究を通して, 日本建築学会計画系論文報告集, 452 巻, 1993
- 12) コロナ禍大学キャンパス利用者実態調査 2020 報告, 日本建築学会キャンパス・リビングラボラトリー小委員会
- 13) 佐々木葉, 私の風景の日常性と地域景観認識モデル, 景観・デザイン研究講演集, No. 8, 12 , 2012
- 14) 岡本卓也, 林幸史, 藤原武弘: 写真投影法による所属大学の社会的アイデンティティの測定, 行動計量学, 第36 巻第1 号, 2009
- 15) 松永幹生, 後藤春彦, 吉江俊: 大学街における場所の習慣的利用に見る「場所感覚」とその継承, 日本建築学会計画系論文集, 2019 年 84 巻 760 号 p.1411-1421